

Title	平成23年度 各委員会紹介
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム人文科学分野論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2011
Jtitle	活動報告書 Vol.5, (2011.) ,p.15- 18
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	第1章：拠点概要
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002002-20120300-0015

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

教育研究プログラム委員会

本拠点における後期博士課程プロジェクト科目は研究科横断的に構成された複数指導体制による研究参加型の授業で、教育拠点としての重要な事業である。本年度は以下の11名の博士課程大学院生がプロジェクト科目を履修し、2012年2月7日(火)、2011年度プロジェクト科目報告会が行われた。まず慶應人文グローバルCOE拠点リーダーの渡辺茂教授より挨拶があり、その後、履修者から報告がなされた。最初にプロジェクトEの山本奨氏(タイトル:音楽作品とは何か)による報告があり、次にプロジェクトCの藤田麻友美氏(タイトル:メタ言語意識と外国語学習の関係)、大野賢一氏(タイトル:自伝的記憶と物語文読解後の記憶の構造の検討)、永井敦氏(タイトル:The Effect of Metalinguistic Ability on Foreign Language Learning)、吉原友美氏(タイトル:日本語否定接頭辞の語形成)、野中滋氏(タイトル:課題価値の強調が「教師の仕事内容」に対する興味に与える影響)、桃生朋子氏(タイトル:中国語母語話者による日本語主語省略構文の獲得)より報

告があった。最後にプロジェクトAの江藤啓介氏(タイトル:Economic Profits Enhance Trust, Perceived Integrity and Memory of Fairness in Interpersonal Judgment)、玉田圭作氏(タイトル:4コマ漫画の速読と眼球運動)の報告があった。報告終了後、各プロジェクト責任者から講評が述べられ、最後に渡辺教授より履修者に修了証が授与された。

プロジェクト科目があることで、分野の垣根を越えた議論および研究を定期的に行うことができた。プロジェクト科目は今年度をもって一旦終了するが、このような機会は是非継続して設けていきたい。

A debrief session for “Project course 2011” was held on 7th February 2012. After nine presentations were given, each student was awarded a certification of completion.

国際教育研究プログラム委員会

International activities in the last year of our GCOE project were, of course, affected by the events in Tohoku in March 2011 to a considerable degree. Several potential speakers from abroad expressed understandable reservations about visiting Japan, but all in all and thanks to the flexibility of all parties involved (e.g. with regard to postponements and rescheduling), a fair number of events could still be organized.

The first was the interdisciplinary symposium “Introspection in humans, animals, and machines”, held on Sunday, May 15th, 2011, with speakers from such diverse fields such as animal psychology and robot studies, thus providing a multi-dimensional account of one of the most crucial elements of cognitive consciousness. Prof. Jérôme Sackur of the Laboratoire de Sciences Cognitives et Psycholinguistique, Département d’Études Cognitives, École Normale Supérieure, Paris, France, who participated in this symposium via video-link, later gave a lecture in July in Mita on “Phenomenality as a Psychological Construction” in which he presented suggestions to give a neurophysiological and psychological account of the distinction between phenomenal and access consciousness.

Also in July, we had an anthropology symposium on “Multi-Sensory Aesthetics and the Cultural Life of the Senses: The Sensory Turn in Anthropology” with Prof. David Howes from Concordia University in Montreal, Prof. Yukiko Katoh (Ritsumeikan University) and Yosuke Shimazono, (Keio CARLS/Kanazawa University).

The highlight of the year was no doubt the large Global COE Symposium “Toward an Integration of Logic and Sensibility—from Neuroscience to Philosophy”, held in September, which shed light on our main topic of logic and sensibility from a manifold of different disciplinary perspectives, such as history of arts, linguistics, and biology. Twenty-four speakers gave fascinating and eye-opening lectures over three days of the most intense academic exchange and provided an excellent opportunity for both members and non-members of our GCOE project alike to share and exchange their respective insights.

Dr. Jens Timmermann of University of St Andrews (UK) was the fourth speaker in the series “Kant’s Transcendental Idealism in Focus” in November with a lecture on “Kantian Dilemmas: Moral Conflict in Kantian Ethics” in which he painted a picture of Kant’s moral philosophy quite different from the standard textbook accounts, and outlined how far in Kant the capacity of judgment is an indispensable tool for solving possible tensions between different positive duties in concrete situations.

Also in November, Prof. Akira Miyake of the The University of Colorado at Boulder, delivered a lecture entitled “Executive Functions and Working Memory: Implications for Different Domains of Psychology”. He suggested that a brief psychological intervention (“values affirmation”) could be a promising way to enhance science performance and learning. The issue was discussed from cognitive and neuropsychological perspectives.

At the time of composing of this report, two more events of the series “Frontiers of Medical Anthropology” (Parts V and VI) are still lying ahead, namely Prof. Jonathan Metzl’s (Vanderbilt University) lecture on “Liberation Psychosis” with comments from Akihito Suzuki (Keio University) in January. Second will be Prof. Metzl again who will be a key participant of the symposium “The Gender of Depression and Child Psychiatry” along with Profs. Toshihide Kuroki (Kyushu University), Yasuo Tanaka (Hokkaido University), Sachiko Horiguchi (Temple University), Junko Teruyama (University of Michigan) as well as Profs. Keizo Miyasaka and Junko Kitanaka (Keio University).

With the GCOE project drawing to a close this coming March, it is a pleasure to express our deep gratitude to all our distinguished foreign guests who have visited us in the course of the last five years, as well as to those who kindly hosted our members on visit overseas. Through the help of many people involved, we were able to establish a network of contacts of a truly global reach.

昨年3月の東日本大震災は本年度の国際活動にも少なからず影響を与えた。招聘講演のいくつかは中止とせざるをえなかったが、関係各所の柔軟な対応により、それでも多くのイベントを開催することができた。

はじめに開催されたのは、5月の学際研究的シンポジウム “Introspection in humans, animals, and machines” であった。講演者の研究分野は、動物心理学、ロボット研究などさまざまであり、認知的意識のもっとも重要な側面について多角的な説明がなされた。ビデオ講演を通じてシンポジウムに参加した Jérôme Sackur 教授 (LSCP, ENS, France) は、7月には「心理的構成としての現象性」と題された講演を行った。この講演では、現象的意識とアクセス意識の区別について神経生理学的・心理学的説明を与えるためのいくつかの提案がなされた。また同月には、人類学シンポジウム「多元的統合感覚と生・美の諸相：人類学・美学の境域の地平」が開かれ、David

Howes 教授 (コンコルディア大学/モントリオール)、加藤有希子 PD フェロー (立命館大学)、島藪洋介研究員 (CARLS/金沢大学) が講演を行なった。

本年度のハイライトは、もちろん、9月に開かれたグローバル COE シンポジウム “Toward an Integration of Logic and Sensibility — from Neuroscience to Philosophy” である。このシンポジウムでは、美術史、言語学、生物学などそれぞれの立場から、論理と感性というわれわれの主題に光が当てられた。24人の講演者が三日間にわたって講演を行い、本 GCOE プロジェクト内外の参加者と議論をかわした。

11月には Jens Timmermann 博士 (セント・アンドリュース大学/UK) が、シリーズ「カントの超越論的観念論」の4人目の講演者として、「カント的ジレンマ——カント倫理学における道徳的対立」というタイトルの講演を行なった。この講演で博士は、判断能力が具体的な状況における義務のあいだの緊張を解く手段として不可欠であるというのがカントの考えであると論じた。同月にはまた、三宅晶教授 (コロラド大学) が「遂行機能と作動記憶」というタイトルで講演を行ない、短期的な心理的介入による学習向上について認知と神経心理学の両面から議論を展開した。

本報告の作成時点では、シリーズ「医療人類学の最前線」(Part V, VI) において Jonathan Metzl 教授の講演 “Liberation Psychosis” (コメンテーターは本学の鈴木晃仁教授) が行なわれる予定のほか、シンポジウム「診断の揺らぎ：鬱のジェンダー&こどもの心と病～精神医学と人類学の立場から」では同教授をキースピーカーとして、黒木俊秀教授 (九州大学)、田中康雄教授 (北海道大学)、堀口佐知子 (テンブル大学)、照山絢子教授 (ミシガン大学)、宮坂敬三教授 (本学)、北中淳子教授 (本学) によって講演が行われた。

本プロジェクトはこの3月で終了となるが、過去5年のあいだに本学を訪れてくれた海外の研究者すべてに、そして、海外で本プロジェクトのメンバーを暖かく迎えてくれた人々に、深い感謝の意を表することができることをうれしく思う。多くの人の助力のもと、われわれは文字通りの意味でグローバルな広がりをもつ研究ネットワークをつくることができた。

教育研究施設委員会

MRI 研究施設

本年度はプログラム最終年度であり、施設について特に新規な事業は行わず、研究が年度内に完結することを目標にして活動した。以下述べるように各施設はほぼ予定通りの教育研究上の成果を上げることができた。リース契約であった MRI 施設以外はなんらかの形で今後の教育研究施設として利用される見込みである。

ファンクショナル MRI の実験設備は、安定運用期間に入っている。最終年度である本年度は、特に稼働率が高い状態が続いており、10月以降は土日祝日を含め、午前9時から午後9時まで12時間フル稼働の日が多い状態にある。MRI 安全倫理委員会に申請された研究プロジェクトは、既に終了したものも含め、約100件近くに及んでおり、非常に活発に研究が進められた。MRI に携わる研究者の数も50名を超えている。研究成果

についても、国内外の専門誌に続々掲載されている。NIRS については東宝ビルでの利用とともに医学部での新生児の脳活動測定も積極的に行われ、これらの研究は GCOE プログラム終了後も引き続き共同研究として行われる。動物実験室では共焦点レーザー顕微鏡での研究も本格化し、またマウス用タッチスクリーンの訓練も順調に成果を上げている。つくばカラス生態研究施設では、設置から継続実施してきた4件の実験を終えた。設置以降、管理・衛生面全般での問題も生じることなく運営を行うことができた。

カラス生態研究施設

つくばカラス生態研究施設では、教員1名、非常勤研究員1名が実験・観察研究を実施し、設置から継続実施してきた4件の実験を終えた。成果として、和文誌の掲載1報、和文書1

報、英文誌の投稿中1報、執筆中1報があった。他機関からの訪問は、学生2名、教員1名、企業1名、また、1件のTV撮影があった。設置以降、管理・衛生面全般での問題も生じることなく運営を行うことができた。

マーモセット研究施設

マーモセット研究施設では、現在50頭を超えるコモンマーモセットの飼育と繁殖を行い、行動実験に用いている。昨年度確

立したプロトコルを用い、世界で初めて、マーモセットが熊手型の道具使用行動を獲得したことを国際誌に発表した。オペラント実験系では、物の大きさを相対的に判断するか調べる「移調テスト」や、新奇対象物への「般化テスト」を行い、マーモセットの基本的な視角認知能力について検証した。また、場所や刺激を手がかりにした遅延見本合わせの訓練に成功し、モデル動物の記憶検査に実用可能な評価法を確立した。

拠点維持検討委員会

拠点維持検討委員会は、本グローバル COE が完了した後、その成果をどのように引き継ぐかについて、「研究面」と「教育面」の双方から討議と、拠点維持のための活動を行った。本グローバル COE は、社会学研究科と文学研究科とが中心となり進めてきたが、今後、どのような分野と連携し、新たな研

究領域を開拓するかについて、新たな外部競争的研究資金の取得を目指した研究プロジェクトの立案を行った。研究を支えてきた脳機能研究を博士課程の教育目的にどのように活用するか、国際的な水準での博士課程教育を実現するためにどのようなシステムを構築するか、などの検討を進めた。

研究成果発信支援・プログラム委員会

英文論文執筆のための講習会

この講習会は主に大学院生、若手研究者を対象に、英文雑誌論文の執筆を援助、鼓舞することを目的にしている。筆者は国立大学に長く在職した経験から、大学院生、若手研究者の英文論文執筆に関する大学間の格差を痛感した。このグローバル化の時代に、外国の研究者の研究を紹介するだけでは、日本の学問の進歩はない。英文雑誌論文をもつことの意義については、世界の多くの研究者に論文が読まれて初めてサイエンスの世界の一員になること（したがって英文で書く必要がある）、また、学術振興会などの研究費の獲得や研究・教育の職を得ることにプラスになることを紹介した。執筆の後押しについては、研究テーマに関連する論文の探し方については PubMed、投稿する雑誌の選択とそれに関連する Impact Factor の説明は Journal Citation Reports、個々の論文の評価（引用度数）は Web of Science、Google Scholar で検索することを、インターネットを利用して実演した。また、論文執筆から投稿、査読者の評価、それへの対応を実例で紹介した。大学院生や若手研究者は英文の執筆に慣れていないので臆する傾向があるが、英文論文執筆は習慣の要素が強いので、英文校閲会社などの利用で克服、さらに上達できると執筆を鼓舞した。なお、学部授業

や大学院入試に英文執筆を導入する必要性を感じている。

脳の講習会：基礎知識

今年度は基礎知識を持った主に大学院生、若手研究者を対象にしたので、あえて広報、宣伝活動をしなかった。そのため参加者は少なかったが、内容の濃い講習会となった。筆者が担当したが、以下に日程と内容を簡単に記す。

8月1日 感覚・知覚：「感覚バッファ」という概念を提唱し、高次バッファからのフィードバック、認知制御系からのトップダウン機能の重要性を強調した。

8月2日 運動・行為：ミラーニューロン研究に基づき、自他の運動を問題にした。自己の運動だけでなく、他者の行為やその意図の理解まで論じた。

8月3日 記憶：主に計算論が主張する海馬の機能に焦点を当てた。それらはラットなど動物で検討されることが多いが、ヒトの脳画像研究による研究を紹介した。

8月5日 情動・動機づけ：これまでは情動研究が多かったが、現在は動機づけの研究が盛んである。報酬、罰の脳内機構とそれによる行動の維持、変更の研究を紹介した。

広報委員会

広報委員会は、グローバル COE プログラムで得られた研究成果を、学内、国内、海外に広く発信するための企画と運営を行ってきた。以下の事業を通して、事業推進担当者、大学院生、研究員、および各班それぞれの研究成果を発信してきた。また、関連領域の研究者に向けて専門的な情報発信を行うのと同時に、一般の方たちに向けて、わかりやすく情報提供を行う企画も実施した。

- (1) 年3回（7月、10月、3月）、ニュースレターを作成し、シンポジウムの成果、研究成果、研究レポート、若手の研究紹介をおこなってきた。各内容の要約は英文とし、海外への発信も行っている。外部に開かれたグローバル COE の方針のもと、巻頭言では、学外の専門家からの意見、期待をいた



- だいてきた。
- (2) 英文の成果報告書である CARLS Series of advanced study of logic and sensibility 第5巻を発刊した。事業推進担当者、大学院生、共同研究者の研究成果の発表を行った。また、海外の関係大学にも送付している。
- (3) 研究成果を集大成した Logic and Sensibility を発刊した。
- (4) 京都大学グローバル COE 「心が活きる教育のための国際的拠点」との共催シンポジウム（「『こころ』を知る、『こころ』を活かす」）を、慶應義塾大学において公開で実施した。両拠点のリーダーによる研究の総括、『こころ』に関する研究成果報告、パネルディスカッションを行い、一般参加者と活発な討議を展開した。

倫理委員会

今年度は、6月と10月に開催された文学部の研究倫理委員会において、GCOEに関わる研究のうち、心理学専攻から提出された申請について審査が行われた。申請件数はGCOE以外の研究計画も含めて約80件で、昨年度より約30件増加し、審査申請の普及が見られた。委員会審査に先立って、昨年度より導入された心理学専攻内ピア・レビューの体制の強化をはかり、また研究倫理委員による簡易審査を進めた。

教育学専攻から提出された双生児の行動ゲノミクス研究の計画書については、他大学と共同で実施される遺伝子解析をその

一部としているため、これまで、三省倫理指針に適合するよう、医学専門委員の協力を得て研究倫理委員会を拡充して対処してきた。今年度は、提出された研究計画について、9月に専門委員を中心に、コンサルテーションを行い、これを受けて修正された研究計画書を審査するために、11月に拡大研究倫理委員会を開催した。遺伝子解析研究については、わけても、専門家が参加者に個別に説明し、理解を確認すること、解析結果が他の研究機関に提供される場合は、その研究目的を明示して同意を得ること、この2点が強調された。